

魏紹昌氏のこと

樽本照雄

魏紹昌氏の論文「《冰山雪海》是冒名李伯元編訳的一本仮貨」は未発表原稿で、本誌のために特別に御寄稿下さったものである。



魏紹昌氏

本誌創刊号で劉鉄雲研究資料目録を編集した時は、氏の『老残遊記資料』が影印されており参考になった。しかし、『老残遊記資料』と同時に発行されている『孽海花資料』は、故鳥居久靖氏の紹介記事があるだけで原本を見ることができない。本誌第2号で曾孟樸研究資料目録を作成して、唯一の気残りがこの『孽海花資料』であった。

1977年12月、上海復旦大学歴史研究室を訪問した際、資料室には筑摩書房の『展望』はじめ、日本の最新刊行の雑誌がならべられており、研究誌等も日本からの寄贈を歓迎するといわれはしたが外交辞令としかその時の私には受け取れなかった。資料の交換など出来るのだろうかと思半信半疑だった。

わずか2週間の旅行であったが、話に聞いていたほどの窮屈さがなかったのも、四人組打倒後年も経っていたからだろう。にもかかわらず、復旦大学での研究者の言葉

を真に受ける気にはならなかったのには理由がないわけではなかった。

1975年4月に北京大学図書館あて、清末小説雑誌についての問い合わせをしたことがあり、ついに返事をもらうことができず研究交流についての疑惑を拭い去ることができなかったのだ。状況の変化が本物であるらしいと思ったのは帰国後のことである。

『人民中国』1978年8月号に、内外の名作が復刊されていることが報じられ、『官場現形記』が再刊されたことがわかった。また、『二十年目睹之怪現狀』上・下も再刊後日本でも入手でき、清末小説関係の書籍が再び日の目を見たということに情勢の変化を確信した。

私は思い切って直接魏紹昌氏に手紙を書いたところ、しばらくして『孽海花資料』が氏の丁重な手紙とともに送られてきた。

その後何度かの手紙のやりとりでわかったのは、『李伯元研究資料』と『吳趸人研究資料』が本年中に出版されるということ、『鴛鴦蝴蝶派研究資料〔作品部分〕』も来年には刊行されるということ等である。1950年代に阿英の『晚清文学叢鈔』等資料集が陸続と発刊されたが、その再現であるかのような模様だ。

原稿をいただいたのをよい機会に、氏の

研究経歴をおたずねすると別掲の氏自筆編著目録、肖像とともに次のようなお返事がきた。

樽本照雄氏に答える

魏 紹昌

私は1922年5月16日、上海市に生まれました。原籍は浙江省上虞県です。1943年上

海光華大学文學院を卒業し、1954年より現在まで、ずっと中国作家協会上海分会で仕事をしています。仕事の重点と私自身の興味は、ともに現代文学（即ち五四運動以来の新文学）の方面にあります。後に清末小説関係の資料を数冊編集しましたが、それは当時近代文学史を研究する人々が、皆この方面の資料の欠乏を感じていたため、私

關於清末小説部分編著目録（魏紹昌氏自筆）

書目：

老残遊記資料	上海中華書局	1962. 4
孽海花資料	上海中華書局	1962. 4
*吳趸人研究資料	上海古籍出版社	1979（即出）
*李伯元研究資料	上海古籍出版社	1979（即出）
鴛鴦蝴蝶派研究資料〔史料部分〕	上海文芸出版社	1962. 10
*鴛鴦蝴蝶派研究資料〔作品部分〕	上海文芸出版社	1980擬印

篇目：

*《老残遊記》残稿	文 匯 報	1961. 1. 19
*《孽海花》の兩種版本	文 匯 報	1961. 2. 26
*《孽海花》作者生年考	羊 城 晚 報	1961. 3. 23
*《老残遊記》続集的一段内幕	羊 城 晚 報	1961. 4. 17-18
李伯元与劉鉄雲的一段文字案	光 明 日 報	1962. 3. 25
《繁華夢》非李伯元著作考	文 匯 報	1962. 5. 20
*曾孟樸自擬的《孽海花》人物名單	天 津 晚 報	1962. 6. 3
*吳趸人的紅豆詩	天 津 晚 報	1962. 6. 10
《白話西廂記》的楔子	天 津 晚 報	1962. 7. 1/8
*李伯元の書画潤例	羊 城 晚 報	1962. 7. 10
茂苑惜秋生其人其事	光 明 日 報	1962. 7. 14
*《跋〈海上花列伝〉》の原文	天 津 晚 報	1962. 7. 15
《官場現形記》的写作和刊行問題	文 匯 報	1962. 7. 11
★《冰山雪海》是冒名李伯元編訳的一本假貨	清末小説研究第3号	1979. 12. 1
★李伯元の四種雜著考	野 草 第 24 号	1979. 10. 1
訳名「李伯元の雜著4種について」	樽 本 照 雄 訳	

★ 発表紙，発表年月日は樽本が補足した。*は未見。

は力を尽して先輩阿英同志の驥尾に付しいささかの空白を埋める仕事をしたにすぎません。しかし、私の能力には限りがあるため、その成果は言うほどのこともないのです。私が清末小説について4種の資料を選んで編集したのはなぜかという、それは魯迅先生の『中国小説史略』の啓示を受けたからです。彼は清末小説の特徴を「譴責小説」と概括し、4人の代表的作家とその代表作品をかかげましたが、これは権威のある科学的論断です。材料を収集する過程で、劉鉄雲と曾孟樸のふたりは官吏にもなったし商売もしたし、彼らの書いた主要作品はそれぞれ1篇だとわかりましたので作品を主とした『老残遊記資料』と『孽海花資料』を編集しました。李伯元と吳趸人のふたりは多作の職業作家です。『官場現形記』と『二十年目睹之怪現狀』のほかに、それぞれが重要作品を持っています。たとえば李伯元の『文明小史』『庚子國變彈詞』等、吳趸人の『恨海』『痛史』等。ですから作家を中心とした『李伯元研究資料』と『吳趸人研究資料』を編みました。鴛鴦蝴蝶派小説については、その発展と影響は民国時代であるとはいえ、根源は清末より始まります。私は1962年『鴛鴦蝴蝶派研究資料』の「史料部分」だけを出版しましたが、もうひとつ「作品部分」もすでに編集しおわっており、それには20篇の長篇小説の抄録を載せ、すべての物語の内要提要をあわせ書き、さらに20篇の短篇小説を選んで掲載しています。おおよそ鴛鴦蝴蝶派の代表作家と代表作品は、ここにほとんどすべてが網羅してあります。この「作品部分」は「史料部分」の姉妹篇ですが、当時は出版できませんでした。来年には読者にお目にかけることができるでしょう。(1979年6月14

日付来信)

魏紹昌氏白筆の編著目録をながめてみると、一連の基礎資料の編纂がまず目を引く。清末小説研究の分野において資料の不足が長く嘆かれており、阿英の著作の間隙を埋めるまことに貴重な仕事であることは間違いない。論文のすべてを日本で読むことができるわけではないが、そのいくつかを見る限り、資料の発掘と資料に立脚した論を展開するのが氏の研究方法とうかがえる。特にこの分野では、政治的立場で作者あるいは作品を論断して行こうとする傾向が強く、ややもすれば資料の発掘などの基礎的作業を軽視する風潮がないわけではない。その中であって氏の研究態度は学ぶ価値のあるものだ。

本誌第2号の編集ノートで、「魏の仕事を含めて清末に関する研究発表が行なわれる日はいつのことか」と書いたが、その日は予想外に早くやって来た。17年ぶりの資料集刊行と論文発表を率直に喜びたい。

(たるもと てるお)

[附記] 同じく氏の未発表論文「李伯元の四種雜著考」は拙訳「李伯元の雜著4種について」として『野草』第24号1979年に掲載された。そのほか以下の拙稿を参照されたい。

魏紹昌編『孽海花資料』について

中国文芸研究会会報17 1978. 12. 13

魏紹昌氏の李伯元に関する2編の論文

同上18 1979. 2. 27

魏紹昌氏とその著作

同上20 1979. 7. 20